

芥川龍之介「上海游記」「Xの矛盾」

——上海在住の日本人——

宮崎 由子

序

何でもXと云ふ日本人があつた。Xは上海に二十年住んでゐた。結婚したのも上海である。子が出来たのも上海である。金がたまつたのも上海である。その為かXは上海に熱烈な愛着を持つてゐた。たまに日本から客が来ると、何時も上海の自慢をした。建築、道路、料理、娯楽、——いづれも日本は上海に若かない。上海は西洋も同然である。日本なぞに齷齪してゐるより、一日も早く上海に来給へ。——さう客を促しさへした。そのXが死んだ時、遺言状を出して見ると、意外な事が書いてあつた。——「骨は如何なる事情ありとも、必日本に埋むべし。……」

私は或日ホテルの窓に、火のついたハヴァアナを脚へながら、こんな話を想像した。Xの矛盾は笑ふべきものぢやない。我我はかう云ふ点になると、大抵Xの仲間なのである。

(一九 日本人)より)

上は、芥川龍之介の紀行「上海游記」の一節である。Xは長年上海に住む日本人だ。当時、上海は西洋列強によつて半植民地化され、経済、文化の発展した大都市だつた。Xはこの上海という土地、文化に愛着を持つてゐる。日本から来た客と会うたびに、上海へ移住するようにしきりに勧めてさへいた。そのXが死んだ。Xは人生の大半を上海で送つたのだから、当然死ぬ時も「上海に骨を埋むべし」と考えるはずである。しかし予想に反して、遺言状には遺骨を「如何なる事情ありとも、必日本に」埋めるように書いてあつた。このXの行動を、芥川は、「Xの矛盾」と称した。この挿話は、「こんな話を想像した」とあるように芥川の創作である。Xという人物を創造した契機は、芥川の上海で過ごした実体験にあるのではないか。Xの人物像から、芥川が持つた上海在住の日本人の姿が明らかになる。

「X」の話が挿入されている紀行「上海游記」の評価は、総じて低い傾向にあつた。吉田精一の「つまらない讀物で

はないが、要するに小説家の見た支那であつて」「支那の現在や将来を深く洞察し得たものではない」という評価に始まり、芥川は中国の現状を描けていないとされてきた。その後、戸田民子の里見医院関係の実証研究³によつて、「上海遊記」に新しい視点が提示され、近年では徐々に再評価の動きが高まっている。また、中国の研究者からも賛否両論の立場で研究が行われている⁴。しかし従来の論の主要なテーマが芥川が中国の現状を描写できているかであったため、「上海遊記」における中国・中国人の描写に関する分析が数多くなされてきたのに比して、同作から窺える上海在住の日本人についての考察は十分ではないように思われる。当時（大正九（一九二〇）年における）上海在住の日本人は一〇二一五人で、上海在住の外国人の中でも多数を占めていた⁵。更に、作中で書かれているように、芥川は中国語が殆ど話せなかった。そのため、実際に上海でコミュニケーションをとる際には、多くの日本人の援助を受けている。それらを考え合わせれば、「上海遊記」を分析する上で「日本人」は無視できない存在であると言える。

本稿では芥川龍之介の持った、上海在住の日本人への興味という観点からこの紀行を読み直したい。特に「上海遊記」の全二十一章中で、「十二 西洋」「十九 日本人」の二章をとり上げる。この二章をとり上げる理由は、「上海遊

記」の中でも特に上海在住の日本人が主に登場する章だからである。この二章を、当時の上海の実情も考慮しながら考察する。更に、上海の日本人像から、芥川龍之介が感じ取ったナシヨナリズムの萌芽をも明らかにしたい。

一、上海と日本人

芥川龍之介は大正十（一九二一）年、大阪毎日新聞社の社命を帯びて、中国を四カ月にわたつて旅行した。旅行後にはその成果として「上海遊記」「江南遊記」「長江遊記」「北京日記抄」「雑信一束⁶」を発表している。更に、大正十四（一九二五）年にはこれらをまとめて「支那遊記⁷」という一冊の単行本として刊行することになる。今回とり上げる「上海遊記」は、一連の旅行記の中で、一番初めに書かれた作品である。舞台である上海は、芥川が中国で一番初めに訪れた土地である。芥川は、旅行前からの体調不良が悪化し、上海で約一カ月の入院生活を送ることになる。

芥川は上海を訪れて中国人の乞食や裏町の尿臭、誘拐や殺人が日常茶飯事である状況に驚き、反感を示す。それは、芥川が従来持っていた中国文化への憧れを破壊するものであった。当時上海は、英・米の共同租界、フランス租界が設けられ、様々な国籍の人々が暮らす半植民地都市だった。

当初は、外国人と中国人が別れて暮らす「華洋分居」であったが、第二次土地章程によって、「華洋雜居」が可能となり、様々な国籍の人々が入り混じる「國際都市」となった。日本人は、諸外国に少し遅れて上海に進出している。

一八九四く九五年の日清戦争の結果、日本は清国と一八九五年四月一七日の下関講和条約、一八九七年七月二一日の日清通商航海条約並びに付属議定書を締結したことにより、開港場における日本人の居住貿易権、居住貿易に関する最恵国条款、そして上海その他開港場における租界設置権を獲得し、ここに上海における租界関係国の一つとなった。

(注(8)と同)

日本人居留民は共同租界に土地を買い、徐々にその勢力をのびていった。上海における日本人居留民の急激な繁栄は、当時の上海在住の外国人の人口からもわかる。上海に租界が誕生した当初、外国人居留民で、最も数が多いのはイギリス人の一三七二人であった。そのイギリス人と比べると、明治三(一八七〇)年に初めて上海に移り住んできた日本人はたったの七人(全て男性)であった。

その後、上海共同租界における外国人居留民の人口に

占める日本人の割合は徐々に増えはじめる。そして芥川が旅行する前年の大正九(一九二〇)年には、外国人総人口二三三〇七人に対し、日本人の人口は一〇二二五人と、実に半分近くを占めている。これは、イギリス人の人口(五三四人)をはるかに超えている。上海から地理的にも近い日本は、諸外国を抑え、上海での勢力を伸ばしていったのである。

上海に日本社会が生れると、階層化が進んだ。日本人居留民は二通りに大別できるとされる。「土着派」と「会社派」である。

上海の日本社会は、人口総数が多い分、階層分化が激しかった。「ひと旗組」(一旗あげるために上海に来ている人々)は虹口で日本人相手の商売に従事し、最後は上海に骨を埋める覚悟であった。このような人々を「土着派」と呼ぶ。一方、大銀行・大会社から上海支店に派遣された人々もいた。彼らにとつて上海は任地の一つに過ぎず、任期が終われば日本へ帰るか、ニューヨーク、パリなどの支店に転動して行つた。このような人々を「会社派」と呼ぶ。「土着派」と「会社派」のライフスタイルや意識には大きな差があり、居留民組織の中で対立を招くこともあった。

「上海」(榎本泰子著)

両者の最大の違いはその職業や地位ではない。会社派は企業の経営方針や在任期間があることから上海が彼らの人生における単なる通過地点に過ぎないのに対し、土着派は上海を自らの事業発展を賭けた永住地としていることにあつた。

「上海に生きた日本人…幕末から敗戦まで」(陳祖恩著)
(どちらも傍線引用者)

つまり、「土着派」は上海に永住する覚悟で日本から移つて来た日本人であり、「会社派」は上海を仮の住まいとしている日本人である。両者は初めから上海に対する姿勢が違ふ。「土着派」の人々が上海を終生住むべきと定めているのに対し、「会社派」の人々にとって上海は通過地点の一つに過ぎない。「土着派」と「会社派」の人々の上海への愛着の質に差異があるのは当然である。

また、例え「土着派」の人々が豊かな生活を送っていたとしても、「国際都市」上海において新参者・周縁者であり、西洋文明に対する劣等感・孤立感・疎外感(被害者意識)を強く抱いていた。そのため、「自己の拠り所は日本国家そのものであり」「自らを「内地の者」に似せて生きること

に執着し、日本的な生活にこだわった」のである¹⁾。芥川が注目したのは、複雑に階層化された上海在住の日本人が持つ哀愁であつた。

次に、こうした上海の日本人の心理を当時の作家が掘んでいたかどうかについて考察する。もともと芥川は中国文化、中国の古典作品に興味を持っていた。そのため、中国古典を素材にした作品や、中国を舞台にした小説を数多く書いている。芥川の他に、大正時代の日本文壇で、中国を好んで描いた作家に、谷崎潤一郎と佐藤春夫がいる。芥川は二人の作家の中国旅行とその成果にかなり関心を持っていた²⁾。谷崎潤一郎は、大正七年十月上旬から、同年十二月末まで中国を旅行している。その成果として、谷崎は多くの中国旅行を素材にした作品を書いた。その作品の中から、芥川が「上海游记」を書いた大正十(一九二一)年八月以前の作品を挙げると次のようになる。

大正八年

「蘇州紀行」(『中央公論』二月)

「画舫記(續蘇州紀行)」(『中央公論』三月)

「秦淮の夜」(『中外』二月)

「南京希望街(續秦淮の夜)」(『新小説』三月)

「支那劇を観る記」(『中央公論』六月)

「西湖の月（青磁色の女）」（『改造』 六月）

「支那の料理」（『大阪朝日新聞』 十月）

「天鷲絨の夢」（『大阪毎日新聞』 十二月）

大正九年

「蘇塔婆」（『改造』 八月）

多くが、中国の文化に触れた谷崎がその体験を描いた耽美的な作品である。芥川は、谷崎の中国旅行に関心を持ち、その成果である作品群に目を通していたと考えられる。この作品群の中でも、「秦淮の夜」については、芥川の作品の附記中で言及がある。芥川が上海旅行の前年に発表した「南京の基督」¹³の附記には「谷崎潤一郎氏作『秦淮の一夜』¹⁴夜に負ふ所尠からず。附記して、感謝の意を表す。」と書かれている。「秦淮の一夜」は、谷崎の作品「秦淮の夜」のことである。

当時、芥川が文学的に最も興味を持っていた谷崎潤一郎と並んで、佐藤春夫も芥川より少し前に中国旅行を行い、その成果として、中国を素材にした作品を作っている。佐藤春夫が旅行を行った大正九（一九二〇）年から五年後の、一九二五年に発表された「女誠扇綺譚」（『女性』大正十四（一九二五）年五月）は、台湾が舞台の怪奇・神秘小説である。両者の残したこれらの作品は、主に、中国の人や文化といっ

た異国情緒に視点が向いた作品であり、日本人居留民の実情を描いたものは殆どない。二人の作品と比べると、芥川は現地に住む日本人の事を正確に描写している。谷崎、佐藤両者と芥川の違いにも留意しつつ、次に芥川自身の上海旅行について考えて行きたい。

二、芥川の上海旅行

芥川は旅行中、幾度となく体調を崩した上、期待していた中国の文物に対しては失望と幻滅の連続だったようである。はじめに芥川の中国渡航のいきさつと上海旅行の日程を記す。大正十（一九二一）年二月二十二日、芥川は社員であった大阪毎日新聞社から、中国特派を提案される。中国に興味のあった芥川はすぐにこの提案を承諾する。旅行以前にも芥川は「杜子春」¹⁵「南京の基督」など、中国を舞台とした小説をいくつか書いており、中国文化・古典への興味がうかがわれる。

また薄田泣菫宛ての書簡では、「紀行は毎日書く訣にも行きますまいが上海を中心とした南の印象記と北京を中心にした北の印象記と二つに分けて」（大正十（一九二一）年三月十一日書簡）書くこと予告していた。更に、中国に渡る直前には家族に向けて「留守中は何時なん時紀行が新聞に出

るか知れぬ故始終新聞に注意し切り抜かれ置かれたし」(芥川道章宛、大正十(一九二一)年三月二十五日書簡)と手紙を送っている。結局、紀行は全て旅行後に書かれ、「上海遊記」「江南遊記」「長江遊記」までが紀行形式ではあるが、「北京日記抄」「雑信一束」に至っては覚書きである上、量も少量という竜頭蛇尾の結果となった。しかし、旅行直前の芥川が、紀行執筆に意欲を持っていた事は間違いない。

芥川が、執筆の意欲を十分作品に顕せなかつたのは、芥川の体調も影響している。芥川は三月二十一日の門司港発の船に乗るため、東京を三月一九日に出発した。しかし、風邪のため翌日から大阪に一週間滞在することになる。その後三月二十八日に、やっと門司港から筑後丸に乗って上海へ渡った。その船上での様子は「上海遊記」の「一 海上」で描かれている。

玄界灘付近で大シケに会い、芥川は船酔いで苦しむ。その次第を日本にいる家族や友人に手紙で書き送っている。三月二十九日の手紙には、「小生亦船酔の為もう少しにてへドを吐かんとす」(芥川家宛て)「すつかり船に酔ひ少からず閉口しました」(小沢碧童・小穴隆一宛て)「風波に遇ひ小生も危くへドを吐く所でした」(下島勲宛て)と、実に三通もの手紙に此の事を書いている。病氣に加え、船酔いもあり、芥川の中国旅行は出だしから好調とは言えなかつた。

三月三十日に、芥川は上海に到着する。上海で芥川を迎えたのは、大阪毎日新聞社上海支局長の村田孜郎(烏江)、記者の友住(名不明)、友人であるイギリスロイター通信社上海支局の記者トーマス・ジョーンズ達だつた。その日は予定していた東亜洋行というホテル(実際は東和洋行)を気に入らず、宿泊先を万歳館に変更して宿泊している。

しかし旅行前からの不調が祟り、芥川はその翌日から入院することになった。病名は乾性肋膜炎で、入院先は里見医院である。「上海遊記」によれば、入院先では、里見医院の人々、中学時代の友人西村貞吉、井川亮(親友・井川恭の兄)、上海で知り合った俳人の島津四十起、石黒政吉、上海東方通信社の社長波田博、などが頻繁に見舞にきてくれたという。また、「作家とか何とか云ふ、多少の虚名を負つてゐたおかげ」と芥川は記しているが、「時々未知の御客から」「花だの果物だの」「ビスケットの缶」だのを貰つていたらしい。更に、新聞社は不明だが、記者が「文壇の寵児」芥川へのインタビュー¹⁶を行っている。

長い異国での入院生活の中で、芥川は死への恐怖も感じていた。退院後に家族に宛てて書いた手紙には、「一時は上海にて死ぬ事かと大いに心細く相成(候)」とある。「上海遊記」にも入院中、不安を感じた事が書かれている。

それでも七度五分程の熱が、容易にとれないとなつて見ると、不安は依然として不安だつた。どうかすると真つ昼間でも、ぢつと横になつてはゐられない程、急に死ぬ事が怖くなりなぞした。(傍線筆者)

(五) 病院)

死への恐怖は芥川に日本への郷愁を起こさせた。「兎に角病気になる」と日本へ帰りたくなり(候)「(どちらも大正十(一九二二)年四月二十四日・芥川道章宛て)」と家族への手紙の中で、辛い心情を吐露している。入院生活中、異国の地で死ぬかもしれないという恐怖にさらされた芥川は、少なくともその瞬間は祖国日本へ帰りたいと切に願つたのである。

満身創痍の旅行であつたが、芥川は、生れて初めて祖国から離れた事によつて、かえつて強く日本を意識するようになっていた。更にそれは上海在住の日本人、特に「土着派」の人々の心理への興味ともなつて現れる。次に、芥川がこうした「土着派」の人々の心理をどう受け取つたのかを、「上海遊記」の実際の記述から考察する。

三、「十二」西洋

「上海遊記」の「十二 西洋」は会話形式の章である。現地に在住している人物と、旅行者という、二人の日本人が会話する。文字通り、上海における「西洋」文化について述べている。列強の支配を受けていた上海には、様々な国の文化が混在していた。その中でも勢力を誇つたのは、西洋の国々の文化である。そうした当時の上海における西洋文化について、会話者の一人は「場違いな西洋」という評価を下している。

会話から、「答」は「日本人旅行者」(芥川自身の立場と類似している)であり、「問」は「上海在住の日本人」であると推測できる。「答」は上海の西洋文化を批判し、「問」は上海の西洋文化を称賛する。当時、西洋の文化を褒めるのは、ある意味では自然である。しかし「問」の西洋文化への称賛は根拠がなく、他の文化を貶めることで、西洋文化の優位性を主張するものである。「答」は「問」の姿勢に反発しているのである。

会話の内容は上海における西洋文化について、公園、道路、風俗、住居、墓地に至る様々な部分におよぶ。初めは公園の話題である。上海にある、仏蘭西公園、ジェスフィールド公園、新公園などがひきあいに出される。「問」の意見では「上海は単なる支那ぢやない。同時に又一面では西洋」である。そのため、日本よりも上海の公園の方が「進歩し

てゐる」と言う。しかし「答」は、上海の公園を「散歩するには持つて来いだ」と認めてはいるが、「西洋式になりさへすれば、進歩したと云ふ訣でもあるまい」と反駁する。

ただし、「答」は上海の公園そのものを否定しているわけではない。例えば、「仏蘭西公園では、若葉を出した篠懸の間に、西洋人のお袋だの乳母だのが子供を遊ばせてゐる、それが大変綺麗だつた」という風に、自然そのものや、西洋人母子については好感を持っていることをうかがわせる。それに対し、「答」が否定しているのは、公園の規定に伴う西洋人の差別意識である。当時の「パブリック・ガーデン」には中国人と犬は立ち入り禁止という決まりがあつた。「答」は「命名の妙を極めてゐるよ」と言うが、これは皮肉であろう。「問」が「西洋」は日本よりも「進歩」していると主張するのに対して「答」は「西洋」即ち「進歩」とは捉えていないのである。

以下は、二人の会話が着物の話から日本人の風俗の問題に移る場面である。

問。(前略)やはり異人に比べると、日本人は皆貧弱だね。
答。洋服を着た日本人はね。

問。和服を着たのは猶困るぢやないか？ 何しろ日本人と云ふやつは、肌が人に見える事は、何とも思つてゐな

いんだから、――

答。もし何とか思ふとすれば、それは思ふものが猥褻なのさ。久米の仙人と云ふ人は、その為に雲から落ちたぢやないか？

問。ぢや西洋人は猥褻かい？

答。勿論その点では猥褻だね。唯風俗と云ふやつは、残念ながら多数決のものだ。だから今に日本人も、素足で外へ出かけるのは、卑しい事のやうに思ふだろう。つまりだんだん以前よりも、猥褻になつて行くのだね。

(「上海遊記」「十二 西洋」傍線引用者)

「問」は日本人が、「肌が人に見える事は何とも思つてゐない」と非難する。「答」は「それは思ふものが猥褻」と指摘する。つまり猥褻という意識は「多数決」から外れるものに対して、多数派が抱く違和感だと言へる。「多数決」の風俗とは、ここでは「西洋」の風俗のことを指している。「問」の日本人蔑視の感情も、「西洋の風俗」と「日本の風俗」の相違から生まれてゐるにすぎない。

次に、二人の話題は仏蘭西租界の住宅地に移る。「答」は、住宅地で見られた「柳」「鳩」「桃」「支那の民家」などについて「愉快」だと言う。こうした自然や中国の民家は、西洋の文明とは無関係である。「問」は、「あの辺は殆西洋だ

と言う。「赤瓦だの、白煉瓦だの」が良いと褒める。それを受けて「答」は少し過敏では、と思えるほど否定する。「西洋人の家は大抵駄目だね。」「少くとも僕の見た家は、悉下等なものばかり」など、拒否感を露わにしている。その態度に驚く「問」に対して「答」は、「僕は西洋が嫌ひなのぢやない。俗悪なものが嫌ひなのだ。」と答える。

ここで「答」が「大抵駄目」「下等」「俗悪」と批判しているのは、住宅の作りが文字通り「下等」であることではないだろう。現に仏蘭西租界は最も裕福な人々が住む土地であった。「答」がここで非難しているのは、「柳」「鳩」「桃」「支那の民家」などの、もとからその土地にある景物には目を向けず、ひたすら「西洋」の住宅を称賛する「問」の感覚に対してだと考えられる。

最後に二人は西洋式の墓地について議論する。「問」が「静安寺路の西洋人の墓地」について聞くと、「答」は初めて答えに窮する。そして「あの墓地は気が利いてゐた」と言うが、「大理石の十字架の下より、土饅頭の下に横になつてゐたい。況や怪しげな天使なぞの彫刻の下は眞平御免だ。」と言ひ捨てる。「答」は始終、西洋文化を否定する立場に回っている。以上の事から、「答」が嫌悪するものの本質がわかつてくる。

「答」が嫌っているのは「俗悪」なものである。「問」が「僕

も勿論さうさ。」と、「答」の意見に同調すると、「答」は「嘘をつき給へ」と非難する。つまり「答」は、「問」が「俗悪」なものを好むと考えているのだ。「答」は「問」に「君は和服を着るよりも、洋服を着たいと思つてゐる。門構への家に住むよりも、パンガロオに住みたいと思つてゐる。かま揚げうどんを食ふよりも、マカロニを食ひたいと思つてゐる。山本山を飲むよりも、ブラジル珈琲を飲み」と責める。つまり「答」の考える「俗悪」なものとは、さしたる根拠もなく西洋文化を奨励し、日本の文化をさげすむ、日本人の文化の受容態度であると言える。「問」という人物の、自国文化の卑下と、西洋文化を過度に評価する態度に「答」は嫌悪感を持ち、批判しているのだ。

ただし、気をつけなければいけないのは、「問」と「答」によつて議論されているのは「本場」の西洋文化ではないという点だ。ここでいう西洋文化は、「上海の西洋文化」である。そこから敷衍すれば、「問」は西洋自体を褒めているのではない。西洋文化によつて「進歩」する上海を間接的に褒めているのであると言える。「答」の「問」に対する過剰な反応は、「問」の盲目的な西洋文化、ひいては上海崇拜に反発したからである。

そもそも二人は立場が違う。先述の通り「問」は、上海に住み、愛着を持つている日本人だと考えられる。自分の

生活する場に愛着を持つのは自然である。西洋文化、ひいては上海そのものを眞賞する心情は理解できる。一方「答」は上海を旅行中の日本人である。「答」からすれば、上海を

激賞する代わりに、日本文化を貶める「問」の主張に反発してしまふのも無理はない。

更に、日本で生まれ、上海に移り住んだとすると、「問」の帰属意識は「故郷（日本）」と「居住している場所（上海）」の二つがあることとなる。引き裂かれた帰属意識が、「上海」に関する全てのものを奨励し、以前住んでいた「日本」を否定させているのだとすると、この「問」の心理は、「Xの矛盾」と通じるものとなる。

しかし、「問」のこの態度こそが「答」の批判的になつているのである。「問」は上海の西洋を「場違ひ」だと感じている。何故なら、上海における西洋文化は、元々上海にあった「柳」「鳩」「桃」「支那の民家」などという文物を排除して繁栄しているからである。その部分に目をそむけている、または気づかない「問」を、「答」は非難しているのである。それがたとえ「答」にとつても「善かれ悪かれ」「見るのは、面白い事に違ひない」「西洋」文化の場合でも、その不快感にかわりはない。この「答」の不満は、上海がもしも日本だった場合、「愛国的義憤」にもつながるものである。

四、「十九 日本人」

「十九 日本人」は、上海に住む日本人について描いた章である。この章は、他の章のような紀行文の形式ではなく、小話形式となつている。構成は、四百字ほどの五つの小話から成る。どれにも題名はない。五つの小話の間は全て「*」で区切られている。小話の内容は「上海紡績17の小島氏宅の桜の話」「同文書院18の寄宿舎の窓から見た鯉職の話」「上海の日本人倶楽部（仏蘭西租界19の松本婦人の邸宅）での日本文壇の話」「南陽丸20の船長竹内氏の日本人売春婦の話」「上海に住みついたXという日本人の話（これのみ完全なフィクションという形式）」をそれぞれ語つたものとなつている。それぞれの小話の舞台として挙げられている「上海紡績」「同文書院」「仏蘭西租界」「南陽丸」は全て、上海に住む上流家庭やエリート階級の日本人がいる場所である。ほとんどが上海で裕福に、または満足して暮らしているはずだ。当初の上海に來た理由である豊かな暮らしをするという目標は達成しているからである。

しかし、そうした人々が持つ、郷愁の念は、実は内地に暮らす日本人よりも強い。芥川は上海で出会つた日本人を観察し、正確に分析・描写している。上海在住の日本人の持つ、「愛国心」とその性格について以下に考察する。

小説の一話目は、「上海紡績の小島氏宅の桜の話」である。小島氏の社宅に招かれた時のことだ。社宅の前庭に植えてあった「小さな桜」を、同行の四十起は「不思議な程、嬉しさうな調子」で指し示し、更に小島氏は「亜米利加帰りのコロムブスが、土産でも見せる」ように自慢した。二人にとって、桜の花は日本の象徴ともいえるものであった。二人の興奮とは裏腹に「桜は瘦せ枯れた枝に、乏しい花しかつけて」いない、みすばらしいと言ってもよいものであると「私」は見ている。「私」は「両先生が、何故こんなに大喜びをするのか、内心妙に思つてゐた。」と語り、一人だけ喜びを共有する事が出来ない。

ここで、この小説の一話目に登場する人物を一人ずつ分析する。上海紡績の小島氏は、先述の分類で言えば、会社派の人間に属する。小島氏は「江南游記」の記述から、芥川のために揚州に住む日本人名士への紹介状を書いてくれた、小島梶郎という人物だとわかる。その小島氏の所属する上海紡績は、当時上海にあった日本の大企業である。小島氏は、自ら望んで来たというよりも、属する会社の命に従つて、上海に移り住んだのであろう。現に自宅を持たず、社宅に住んでいる小島氏は上海に永住する気であるとは考えにくい。

次に、小島氏と共に桜の木に歓喜した島津四十起氏は、

土着派の人間に分類できる。「上海游記」によれば、芥川とは上海の里見病院で知り合つたらしい。芥川の中国旅行中には、案内役を務めるほど親しくなつた人物である。もともと兵庫県淡路島に生れ、処々を放浪後に妻と別れた。そして子供達を親類に預けて明治三十三（一九〇〇）年上海に移り住んだ。俳人であり、上海では、自由律俳句誌『華影』を編集し、『上海在留邦人名録』『上海日本電話帳』を出版した。彼は居場所を、日本ではなく上海に定めていた。「上海游記」の続編として書かれた中国旅行記「江南游記」の中では、しっかりと中国の風土になじんでいる四十起氏が描かれている。

以上に述べたように、桜の花に愛着を示した小島氏と四十起氏は、立場に多少の違いこそあるが、どちらも上海に生活基盤を持つている。それに対し「私」だけは、生活基盤が日本にある。旅人である「私」は、この時点では、二人が桜の花に喜ぶ理由をまったく理解することが出来ない。

しかしその後、「上海に一月程」滞在すると、上海に住む日本人の誰もが小島氏、四十起氏と同じである事を知る。一話目の結びには「日本人はどう云ふ人種か、それは私の知る所ぢやない。が、兎に角海外に出ると、その八重たると一重たるとを問はず、桜の花さへ見る事が出来れば、

忽ち幸福になる人種」であると書いてある。この時点では、「私」は、小島氏や四十起氏のような上海に住む日本人が持つ望郷の念に対しての理解がない。ただ「瘦せ枯れた枝に、乏しい花しかつけて」いない桜の花に、狂気する二人に対して驚くばかりである。

しかし同文書院を見学している際に「私」にも同じような感情が湧きあがる。それは、同文書院の寄宿舎の二階の窓から、「大きな鯉職」を見た時の事だ。鯉職が鮮やかに空へ翻っているのを見て、「私は支那にゐるのぢやない。日本にゐるのだ」と一瞬、錯覚する。その後、「すぐ目の下の麦畑に、支那の百姓が働いてゐるのを目撃して「何だか」「怪しからんやうな氣」がした。「日本にゐる」のだという、一瞬の「愉快」な錯覚が、中国人の農民が働いているという事実を見ることによって急に「支那にゐる」現実へ引き戻された。日本にゐるやうな気持ちに水をさされたことに對して「私」は、「怪しからん」と不快になっているのである。「私」は、こゝろした気持ちになったことで、「桜の事なぞは笑へないかも知れない」と思う。

「私」は、小島氏達の桜を見た時の喜びと、自分が鯉職を見た時の愉快な気持ちも、同じものだと分析した。²² また、私は鯉職に対する愉快な気持ちを、「私は支那にゐるのぢやない。日本にゐるのだと云ふ氣」持だとしている。つまり、

小島氏達が桜の花を喜んでいた理由は、日本にゐるやうな錯覚を得たためだと言える。強い望郷の念が、異国の地を祖国に模す欲求を生んでいるのだ。

実際、当時上海では、多くの日本人が内地と同じような生活を営もうとしていた。「上海の日本人社会」²³によれば、「三井の有力者はフランス租界の自邸の大きな庭園に、日本の桜の木を数本植えている」「男の子供の日には小さい「タロー」は鯉職を買って棒の上に高く掲げる」などの例から、海外で暮らす日本人の「原型」を上海在住の日本人に見出している。

この鯉職の小話に加え、前述のように上海での入院生活を記した書簡を通して、芥川もまた上海にゐる際に、一時でも強い望郷の念を持った事がわかる。鯉職への感情と、異国の地で生死の境をさまよったことによって、芥川は上海にすむ日本人が持つ郷愁の念を理解するに至った。しかし更に考慮しておくべきなのは、芥川が知り合いになった日本人の殆どが、上海で豊かな暮らしを送っていたということである。

三つ目の小話は、松本夫人の家で開かれた日本婦人倶楽部の集まりでの出来事である。「温良貞淑さう」な奥さん達に囲まれて、私は「小説や戯曲の話」をする。その中で、或奥さんが宇野浩二の小説「鴉」²⁴を芥川の小説だと勘違い

して褒めるシーンがある。これは、文化人ぶった「或奥さん」の失敗を馬鹿にした、ユーモラスな小話である。

三つ目の小話に登場する人物は、松本夫人、或奥さんを初めとする、日本婦人倶楽部所属の女性達である。彼女たちは、恐らく夫について上海に移住したのであろう。「皆温良貞淑さう」な様子である。彼女達は日本人の小説家である「私」を招いて「小説や戯曲」などの話をしている。また、この婦人達は上海に住んでいるにも関わらず、日本人だけで寄り集まっている。中国の風土になじもうという努力は、少なくともこの小話からは見受けられない。彼女達は同郷人のみで狭い社会を形成している人々であると言える。

更に、ここでは、上海における上流階級の日本人の様子がさりげなく描かれている。「白い布をかけた円卓子。その上のシラネリアの鉢、紅茶と菓子とサンドウイツチと。」全て仏蘭西租界に住む日本人達の裕福な日常を示唆するものである。前述のように、日本人の上海移住者の中でも、上流階級の者は仏蘭西租界に住む。裕福な生活を送る日本人を描く事で、こうした充足しているはずの人々が故郷を希求することに対しての矛盾が浮き彫りになるのである。

それとは逆に、「上海遊記」の中には、貧しい生活を送っている日本人の描写がある。例えば「三 第一瞥(中)」の一部分である。友人のイギリス人ジョーンズの話によると、

「上海へ引つ越し立てだつた」ある晩、カツフェに行つたジョーンズは、「日本の給仕女がたつた一人、ほんやり椅子に腰をかけていた」のを見る。日本に長く住んでいたジョーンズは懐かしい気持ちになり、彼女に話しかける。

彼は日本語を使ひながら、すぐにその給仕へ話しかけた。「何時上海へ来ましたか?」「昨日来たばかりでございます。」「ぢや日本へ帰りたくはありませんか?」給仕は彼にかう云はれると、急に涙ぐんだ声を出した。「帰りたいわ。」(中略)「僕もさう云はれた時には、Awfully sentimentalになつたつけ。」

(「三 第一瞥(中)」)

給仕という職業の不安定さに加え、上海に来たばかりであるという心細さも手伝つて、給仕女は「帰りたい」と泣く。彼女が上海に来た理由も、職を求めためだらうから、日本に帰つたからと言つて、この女性が楽な暮らしをできるわけではない。それでも給仕女が「帰りたい」と口にしたのは、生まれ育つた地への愛着に加え、異国の地への拒否感のためだ。この給仕女には富もなく、到着したばかりで上海になじんでいるわけでもない。そのため彼女の郷愁は自然と理解できる。しかし前述のように、上海に住みなれ、

豊かな生活を送っている人々も激しい郷愁の念を持っている。内地の人間からすると、理解しがたい。そして、祖国への意識が高じた場合、小話の四話目のような心理が生れる。

小話の四話目は、南陽丸の船長竹内氏が、日本人売笑婦を見た話である。竹内氏の話では、「英吉利」だか「亜米利加」だかの船乗りが「一と目見ても、職業がすぐにわかる」日本人の女と、ベンチに座っていた。それを見て彼は「不快な気もち」がしたという。単に売笑婦を見て不愉快になつたのではなく、「日本人の女」という点を竹内氏は嫌悪したのである。

その話を聞いてから「私」も、上海の町を歩いていた時に、走り去る車の中で、三、四人の日本の芸者が、一人の西洋人を囲んではいしゃいでいるのを見た。「が、別段竹内氏のやうに、不快な気持にはならなかつた。」ここから、竹内氏と「私」の間には何か心理的な差がある、と考えられる。

竹内氏は、上海の近くにある蕪湖から九江に行く際に芥川が利用した、南陽丸の船長である。「長江游記」には、竹内氏が中国の人々や文化を「私」に詳しく説明する場面が描かれている。竹内氏は、少なくともこの小話では、小島氏、四十起氏、日本婦人倶楽部の人々のように、中国を日本に模す、同郷人だけでより集まるといふようなことはしてい

ない。しかし、その竹内氏が日本人の売笑婦と西洋人の男を見て「不快な気持」になつたのである。

もしもこれが、フランス人や中国人の女だった場合、竹内氏の反応も違つていようだろう。日本人の女だから「不快な気もち」になつたのだと言える。竹内氏は「職業がすぐわかる」女が日本人だったため、女を日本そのものに置き換えて見てしまつていふのだ。つまり、竹内氏は、西洋人の男と、日本人の売笑婦を見て、西洋に支配される日本を想起したのだと考えられる。上海に住んでいるため、かえつて世界の中の日本を意識してしまうのだ。平常時は上海になじんでいるようでも、蹂躪されると感じた場合には日本を強く意識する。そうした祖国への意識が、竹内氏を「不快」な気持ちにさせたのである。

一方私にとつて「三人か四人の日本の芸者が、一人の西洋人を擁しながら、頻りにはしゃいでいる」場面は、竹内氏のように「西洋」と「日本」の関係とは思えなかつた。芸者が客の相手するのは当然だといふ認識しか湧かなかつたのだらう。芸者が「日本人」であるという点には、あまり注目していない。そのため、私は竹内氏のように「不快」な感情を持つことがなかつたのである。

二人の間、ひいては上海に住む日本人達と「私」との間にある違いとは、「祖国日本との心理的な距離」における差

だ。小島氏、四十起氏、竹内氏等は、上海（もしくは中国全土）でそれなりに成功を納めているか、そこを住む場所と決めている人々である。彼らは、上海に対しての愛着がある上、気軽に祖国日本に帰る事は出来ない。海外にいることのでかえて祖国「日本」を意識することとなる。

対して「私」は、上海に旅行に來ているだけであり、帰ろうと思えばすぐにでも日本に帰る事が出来る。ずっと日本で暮らしていたので、客観的に諸国の中にある日本を意識することもなかった。そうした違いが「私」の上海在住の日本人達との共通理解を疎外する壁になっている。

ただし、「私」は竹内氏が「不快な気持になるのも、まんなら理解に苦しむ訣ぢやない。」とも言ふ。そして、「寧ろさう云ふ心理に、興味を持たずにはゐられないのである。」と述べる。こうした「不快な気持」が「大」になれば「愛国的義憤」になるとも言う。感情が、「不快」や望郷の念という、一個人の問題で終わらず「愛国的義憤」というナショナリズム的な感情に陥ることが、ここではさりげなく指摘されている。

「上海游記」の大半は、実際の芥川の経験を元にしている。そのため、こうした上海在住の日本人における望郷の念も実際に芥川が感じ取ったものであると考えられる。芥川も当初はこうした、上海在住の日本人達の言動を不審に思っ

ていたが、徐々に理解し、知りたいたいと興味を持つようになつた。そして、冒頭に紹介した「Xの話」を想像したのだ。

その「Xの話」が五番目の小話である。Xは、上海在住の日本人の典型として設定されている。人生の大半を上海に暮らし、対外的には日本よりも上海が優れていると主張する。これは前述の「十二 西洋」に登場する「問」の姿勢と通じるものがある。そのXが、恐らく死の直前に、遺言状に「骨は如何なる事情がありとも、必ず日本に埋むべし」と書いた。これを作中では「Xの矛盾」と称している。日本よりも上海が何もかも優れているとし、客に上海に移住しろとまで進めているXが、遺言状には日本に埋葬するようにと指示しているのは確かに矛盾である。

Xは、遺骨を上海に埋める事を拒否し、日本に埋めるように頼んだ。死んだら、日本に帰りたいというのがXの本音である。この小話は「Xの矛盾は笑ふべきものぢやない。我我はかう云ふ点になると、大抵Xの仲間なのである。」と結ばれている。「かう云ふ点」とは、祖国から離れ、海外に住んでいる時だと言ふ。更に、故郷に住んでいようと、その祖国が、例えば他国からの支配などによって、姿を変え、ないがしろにされているという場合も当てはまるだろう。また、「Xの仲間」であるとは、表面的には上海に固執しつつも、実際には故郷日本を希求しているという、矛

盾した心理を持つ事だと考えられる。

この矛盾は、上海で、経済的に豊かな生活を送っている日本人程起こりやすい。何故なら上海という異国の地になじめばなじむほど、故郷日本との心理的な距離は遠のくからだ。帰ることのできない祖国日本が、希求する対象となり、それが高じると強い「愛国心」となる可能性も出て来る。

更に、豊かな生活を送る人々は、上海に対しても愛着を持つている。どちらに肩入れするかと言うと、やはり、現在住んでいる場所、上海であろう。「問」や「X」が、しきりに上海を称賛するのも自分の生活を否定したくないためだ。こうした人々は、日本への望郷の念を抑えている。そのため、上海に住んでいるのに、日本の文物を模したり、日本という国を異常に意識するのだ。そして、内地の人間からすると、一見理解できない部分に、喜びや怒りを見出す。小島氏や四十起氏が桜の花に異常な程喜び、竹内氏が西洋人の船乗りと日本の商売女が一緒にいる所を見て不快になったのもそうである。

芥川は、上海在住の人々のように、一生異国の地で暮らすという縛りが無い。そのため、彼らのこうした祖国への希求に共感できなかった。しかし入院して生死の境をさまよい、一カ月程上海で過ごした後は、芥川にもそれが理解できるようになった。「私」が鯉幟を見て愉快になったのは、

上海を日本と錯覚したからである。そして「私」はそうした心理に興味を持つようになった。「Xの矛盾」とは、祖国日本と心理的に離れる程、逆に高まる「愛国心」によって引き起こされたのである。上海になじみながらも、尚故郷を希求する心と、望郷の念がナシヨナリズムへと陥りやすいという指摘がこの章の根底を流れるテーマである。

結論

従来、「上海遊記」は当時の中国を正確に描写出来ているかどうか、評価基準だった。しかし、当時上海では日本人の人口が多く、一つの社会を形成していた点、芥川が中国語を殆ど使えないため、現地の人々と接するのにも日本人の手を借りていたように、彼の現地での行動の多くが日本人案内者を伴うものであった点、更に「上海遊記」中に日本人に対する言及がある点を考慮すると、「上海遊記」で描かれた日本人に注目しておくべきだと言える。今回は「上海遊記」の第二章「一二 西洋」「一九 日本」を参照した。社命により、芥川は、念願の中国旅行を実現する。しかし当時の中国は、芥川の「支那趣味」を満足させてくれるような地ではなくなっていた。更に芥川は中国に渡航した直後に乾性肋膜炎で入院している。病床の芥川は、故郷の

家族の事を思い、「異国の地で死にたくない」と切に願う。その中で芥川は、故郷を離れて異国の地で暮らすことを決心した「上海在住の日本人」の心理に興味を持った。

上海在住の日本人は、日本と上海の両方に帰属意識をもつ。上海に強い愛着を持つているため、「問」のように日本よりも、上海の全てが優れていると語る。また、日本への強い愛着のため、小島氏や、四十起氏のようにみずばらしい桜の木に歎息するのである。日本婦人倶楽部の奥さん達のように異国の地になじむ事を拒否して、日本人同士で寄り集まる人々もいる。そして海外にいるためにかえって祖国日本を意識し、竹内氏のように内地の人間よりも、敏感な「愛国心」を持つこともある。

実際に接したこれらの上海在住の日本人との触れ合いや、前述のような生命の危険にさらされたことで生れた郷愁は、芥川に上海在住の日本人の心理に興味を持たせた。「上海遊記」の中で「私」によって想像された「X」は、芥川が獲得した「異国の地に帰属する日本人」像の集大成であるといえる。「我々はかう云ふ点になると、大抵Xの仲間なのである」という言葉は、先述の人々に加え「私」にも向けられている。つまり、誰にでも祖国への強い愛着が生れる素地があるのだと芥川は指摘するのである。

「我々」に含まれるのは日本人だけにとどまらない。X

の持っていた郷愁の念は「愛国的義憤」などのナショナリズム的な感情に陥りやすい。「愛国的義憤」に代表される激しい感情は特に、故郷が他国に支配、蹂躪されている際に、人々の心に生れやすいことは竹内氏の話でも説明された。「Xの矛盾は笑ふべきものぢやない。」と「私」は語る。当時、中国において、五四運動に端を発する排日的「ナショナリズム」が起こっていた事を考えれば、「Xの仲間」は単に日本人にとどまらないのではないかと思われる。

注

- (1) 「上海遊記」大正十(一九二一)年(『大阪毎日新聞』八月十七日から九月十二日、「東京日日新聞」同年八月二十日から九月十四日)。
- (2) 吉田精一「芥川龍之介」(三省堂、昭和四十二(一九四七)年十二月)の「二十支那旅行」、引用は同『近代作家研究叢書121 芥川龍之介』(日本図書センター、平成五(一九三三)年一月)に拠る。
- (3) 戸田民子は、「芥川龍之介『上海遊記』—里見病院のことなど—」の中で、里見病院や、島津四十起など、現地の日本人の調査を行った。
- (4) 單援朝、施小焯、祝振媛、張蕾、趙夢雲等が分析を行っている。
- (5) 小島勝馬洪林編著『上海の日本人社会—戦前の文化・宗教・教育』(龍谷大学仏教文化研究所 一九九九年) 三十三頁より。

(6) 「江南游記」大正十一(一九二二)年(『大阪毎日新聞』(朝刊)

一月一日〜二月十三日)。

「長江游記」大正十三(一九二四)年九月一日(『女性』第六巻第三号)。

「北京日記抄」大正十三(一九二五)年六月一日(『改造』第七巻第六号)。

「雑信一束」初出未詳。

(7) 『支那游記』(大正十四(一九二五)年 改造社)。

(8) 高綱 博文「国際都市上海のなかの日本人」(研文出版、二〇〇九年)。

(9) 注(5) 前掲書三十二頁より

(10) 注(8) 前掲書十一頁の表1より。

(11) (8) に同じ。

(12) 小澤 保博「芥川龍之介「支那游記」研究(上)」(『琉球大学教育学部紀要(七五)』、二〇〇九年) に詳しい。

(13) 「南京の基督」大正九(一九二〇)年七月一日「中央公論」第三五年第七号。

(14) 「杜子春」大正九(一九二〇)年七月一日(『赤い鳥』第五巻第一号)。

(15) 東和洋行は、吉島徳三によって、一八八六(明治一九)年に鉄馬路と北蘇州路が交わる辺りに開業した。「上等旅館」に分類され、「一日の宿泊費は半元以上」する、高額なものである。

一八九四(明治二七)年三月下旬、金玉均が洪鍾宇に射殺された事件現場でもある。その東和洋行から遠くない所にあるのが万歳館である。万歳館は一九〇四(明治三七)年に創業し、店主は相川清九郎、場所は西華徳路と閩行路の交差点に位置していた。万歳館は「建物は洋式だが、内装は完全に日本式だった。

ここは、中・上流の日本人が上海に来た時の宿泊地であり、大阪貿易同盟会や海員協会の指定宿でもあった。「上海の日本旅館は、毎日客に刺身、てんぷら、味噌汁など、標準的な和食を提供した。」

(陳祖恩著 芥沢 知絵他訳「上海に生きた日本人…幕末から敗戦まで」(大修館書店、二〇一〇年)より。

(16) 「芥川龍之介全集第二十二巻」(岩波書店平成八(一九九六)年月報二十二の「資料紹介 文壇の寵児芥川龍之助(ママ)氏と語る」より。新聞名は不明。記事には、芥川の入院中の写真が添えられている。記者と芥川が会談している記事である。話題は、雑談から、芥川の作品や文壇にまで及ぶ。

記者「貴方のお作は余り拝見しませんが「秋」だけは強い感興を以て読まれました。いまでも最初の三四行とい、処は暗記してゐる程です。それから「鴨」と……」

氏「そうですね……」

氏は一寸につこりしたが物足らなさそうであつた。

※氏は芥川龍之介のこと

右のやりとりは「一九 日本人」の日本婦人との会話と酷似している。記者が「鴨」と言っているのは実際は「山鴨」という作品である。「十九 日本人」の中でも、日本婦人が宇野浩二の「鴨」という作品を、芥川の作品と勘違いして褒めるというシーンがある。

(17) 上海における日本投資の中で、最大かつ、重要なものは「在華紡」つまり在華日本紡績業である。(高綱 博文「国際都市上海

のなかの日本人」(研文出版、二〇〇九年)より。上海紡績は、日本資本による中国木綿紡績業への直接投資としては最初の会社(芥川龍之介全集第八巻)(岩波書店、平成八(一九九六)年)の注解(神田由美子)よりであった。

(18) 東亜同文書院は、明治三十四(一九〇一)年、南京にあった南京同文書院が上海に移転し、翌年東亜同文書院と改称して成立した。創立団体は東亜同文会、初代院長は根津一である。上海における日本人学校の最高学府であった。東亜同文書院の主旨は「中国や他の外国の実学、日中の英才を教育する」「中国の富強の基を建て、日中友好協力の根を固める」であった。

(陳祖恩著 芥沢知絵他訳「上海に生きた日本人…幕末から敗戦まで」(大修館書店、二〇一〇年)より。

(19) 上海在住の日本人の中でも、富裕層はフランス租界に住んだ。

(20) 芥川は、蕪湖から九江まで南陽丸に乗った。

(21) 「芥川龍之介全集第八巻」(岩波書店、平成八(一九九六)年)の注解(神田由美子)より

(22) 秦剛は「支那游記」―日本へのまなざし」(国文学解釈と鑑賞 平成一九年九月号)、平成十九(二〇〇七)年)において、この部分に言及し、次のように論じている。「海外」にいる日本人の、「桜」を見た時の「幸福」、あるいは「鯉職」を眼にした時の「私」の愉快「はいずれも日本を表象する記号に喚起されたものである。」そうした「国家への一体感が膨張すると」「排他的な自国中心主義の感覚につながる」。

(23) 注(5) 前掲書。

(24) 宇野浩二作「鴉」大正十(一九二一)年四月一日(中央公論四月号)。

(25) 菅美燕は、「上海の位相―芥川「上海游記」と劉呐陽の上海」(國文學 第五十三巻三号 平成二十年二月臨時増刊号)、平成二十(二〇〇八)年)において、「竹内の「愛国的義憤」という観点には、民族主義や種族の差別意識が存在」し、「愛国的義憤」が生れる土台には、中国の女性または中国人全体に対する、差別意識や排他性にあるのだと、芥川は言わんとしていると見るべき」と論じている。

【参考文献】

陳祖恩著、芥沢知絵他訳「上海に生きた日本人…幕末から敗戦まで」

(大修館書店、二〇一〇年)

劉建輝著「増補 魔都上海 日本知識人の「近代」体験」(筑摩書房、

二〇一〇年)

高綱 博文著「国際都市上海のなかの日本人」(研文出版、二〇〇九年)

榎本泰子著「上海」(中公新書、二〇〇九年)

小島勝、馬洪林編著「上海の日本人社会…戦前の文化、宗教、教育」(龍

谷大学仏教文化研究所 一九九九年)

芥川龍之介著「芥川龍之介全集」(岩波書店、一九九八年)

戸田民子「芥川龍之介「上海游記」―里見病院のことなど」(立命

館大学「論究日本文学」、一九八三年五月)

関口安義「特派員芥川龍之介―中国で何を視たのか」(毎日新聞社、

一九九七年五月)

関口安義「中国旅行(芥川竜之介の道程―9―)」(都留文科大学研

究紀要(37)一九九二年)

※本文は「芥川龍之介全集第八卷」（岩波書店、平成八（一九九六）年）に拠る。ルビは省略した。